

# 資料渉猟余話 その■

前回、この欄で日下部鳴鶴（東作）の扁額が紹介された。今回はそれに続いて、同じく「明治の三筆」の一人である巖谷一六の書を紹介しよう。今日、一六については馴染みの薄い人も多かろうと思うので、最初に簡単にその経歴等を述べることにする。

巖谷一六（一八三四～一九〇五）は、近江国水口藩士で、名は修、字は誠卿、号は一六の他に迂堂等がある。幼くして藩医の父を失い、京都に出て医学を学ぶ傍ら、書の中澤雪城に学んだ。二十歳で郷里に帰り藩の侍医と

なる。明治元年、新政府の官吏となり、内閣書記官・元老院議員・太政官大書記官等を歴て貴族院議員となる。この間、来朝した清国の楊守敬に書法を問う

## 巖谷一六の書

と書風が一変し、飄逸の風韻を得て名声が高まった。詩文も堪能で、各地を訪ね、多くの漢詩や書を遺した。

この一六が飯田へ来たのは、今からおよそ百二十年近く昔の明治二十八年五月である。先の鳴鶴の来峡谷に後

れること十有余年である。何でも、その鳴鶴に天竜峡に遊ぶことを勧められたらしい。邸も近く、交友も篤かった両者だけに、うなずける話である。それから彼は、百日余も当地に滞在したというから、よほど飯田がよか

## 鎌倉貞男

つたのであろう。

『天竜峡』（今村良夫著 昭和三十四年 甲陽書房刊）によると、来峡した一六は同月二十八日に平野候二郎郡長や奥村白岸等と天竜峡に遊び、郡長は琵琶を弾じ、一六は五絶十二首の詩篇を残したと

いう。また、一六は三味線多芸で、飯田の花街を驚かせたというし、その多芸にあやからうと、その後一六の名前の芸者が何人もできたほどであるという。写真の書には、「歳在乙未蒲月」とあり、「蒲月」は陰暦五月のことであるから、この頃の作と思われる。

先日、書の仲間から、この頃一六が揮毫した書が飯田市内の名古熊神社に遺されていることを教えていただいた。そこには、大書された「諏訪大神」と「八幡大神」の幟に加えて、拜殿には「義勇」と「大流星」と書いた奉納額がある。さらに近くの公民館には、当

時存在した「稲井学校」（現鼎小学校の前身）と書かれた横額が遺されている。いずれも、落款に添えて、同年七月から九月の年月が書かれている。

このように一六は、日清戦争直後の明治二十八年五月に来飯し、あるいは天竜峡に清遊したり、あるいは求めに応じて詩文を揮毫したり、あるいは飯田の花街に遊んだりして三月以上滞在した。当時、これだけ著名な書家で文化人を受け入れた飯田のすばらしさが偲ばれる。

そんなことを思いつつ鑑賞すると、中澤雪城・巻菱湖・楊守敬といった日中の代表的書家に学び、明治の三筆

の一人と讃えられる巖谷一六の書はやはりすばしいと思う。



一六の書